阿多多羅

第98号
発行
令和4年11月28日
責任者
福島県公立学校
退職校長会安達支部
伊藤末吉

【巻頭言】

笑わない数学

副支部長　松浦健二

「笑わない数学」NHK総合で水曜日夜十一時から三〇分間十二回にわたり放送された。NHK総合ではめずらしい数学の番組であった。司会はお笑いトリオ「パンサー」の尾形貴弘である。第一回目は素数。自然数の中で、1とその数自身でしか割り切れない数を言う。2、3、5、7、11…等である。そのうち3と5、5と7、11と13のように偶数を一個挟んで隣り合う素数ペアを双子素数と呼ぶ。素数については、現在二四八六万二〇四八桁の数まで判明している、これには一〇〇万ドルの賞金がかけられ、今も数学者に限らず素数ファンが探し求めている。更に素数は、自然界や宇宙の法則との関係も示唆されている。素数が無限に存在することは二千年以上前に証明されているが、双子素数が無限に有るかは証明されていない。

今年三月の新聞に、神奈川県に住む十四歳梶田光君が、この超難問「双子素数予想」の証明の論文を小学四年の冬に書いたと載っていた。それが正しければ数学のノーベル賞と言われるフィールズ賞級の業績だ。残念ながら証明は不完全であった。彼は二歳で九九を暗記し、五歳で二次方程式を理解し、小学一年で四百ページを超える数学の洋書を読み始め、最先端の数学に没頭したそうだ。小学四年から、大学で習う複素解析を学んでいて、大学教授に指導を受けていた。その後、「完全数」の研究で「梶田光の定理」等七つの定理を発見している。完全数とは6の約数である1と2と3を足すと6になるように、ある自然数の自身以外の約数を全て足すと元の数になる数のことである。28や496等五十一個が知られている。現在彼は海外のインターナショナルスクールに入学し、オンラインで学んでいる。スポーツ、囲碁、将棋のように、学問でも一つの分野に飛び抜けた才能を発揮する子を見つけ出す教育も必要だと思う。番組に戻り、「四色問題」これは、世界地図を最小何色で色分け出来るか、と言う問題である。一二〇年以上たった一九七六年、コンピュータで証明された。「ポアンカレー最終予想」地上に居ながら、地球の形を調べる事が出来るか。マゼランと仲間が三年かけ地球を一周し、地球が丸い事を証明した。しかし、それでは証明になっていないと言う。もし地球がドーナツ形でも一周できる。宇宙は、ざっくり丸い形と予想した。今はドーナツ形と言われている。Xの2乗＋Yの2乗＝Zの2乗、ご存じの三平方の定理である。余談だが、この定理はピタゴラスが発見する一千年前にバビロニア人によって発見されていた。フェルマーはXのn乗＋Yのn乗＝Zのn乗はnが3以上のXYZの組は存在しない。その証明を見つけたが、この余白はそれを書くには狭すぎる。フェルマーの最終定理である。三五〇年間、多くの数学者がその証明に挑戦した。日本人二人の論文が手掛かりとなり、一九九五年に証明された。

その他、興味深い問題が、わかりやすく放送された。数学は奥が深く、子供にも興味を持って欲しい。再びNHKで放送されるのを期待したい。

【教育随想】

「育ちと体験」

大玉村教育委員会教育長　渡辺敏弘

『育ちには豊かな体験が重要である』このことは、私が改めて申し上げるまでもなく、これまでの様々な調査研究から明らかであり、何より多くの皆様が実感しているところだと思います。

しかしながら、社会構造の変化やそれに伴う家庭環境・教育環境の変化など様々な要因により、体験の質や量が年々低下してきているように感じられます。更にここ最近はコロナ禍のために、その傾向がより著しくなってしまいました。様々な行事や体験活動が中止・延期や規模縮小となり、感染対策のために多くの人手や時間が割かれ、不安や様々な制約によって伸び伸びと活動することのできない現状です。それでも、可能な限り豊かな体験は積み重ねていきたいものです。

本村では、十月一日（土）に、小中学生を対象とした『おおたま・オータム・フェスタ』を三年ぶりに実施することができました。（幼稚園は別に実施）これは、小中学生間の相互交流、学校運営協議会や地域学校協働活動による地域の大人との交流を通じながら、自然や文化、人と関わる体験活動を行うものです。今回は、昔遊びやグラウンドゴルフの体験、村内にある大名倉山や安達太良山への登山、スコアオリエンテーリングやミニ運動会を実施しました。（幼稚園は、両幼稚園と地域協力団体とのスポーツ交流イベントを実施）

今回の取組を通じて、小中学生や関わって下さった方々のたくさんの笑顔や「楽しく学ぶことができた」「他の学校の友達ができた」「グループで協力してゴールできた」「苦しかったけれど、やってよかった」などという声、優しい眼差しで後輩の面倒をみる先輩の姿やそれに対する後輩からの憧れの視線、実施後のアンケート調査などから、『体験』の重要さを再確認するとともに、保護者や地域の理解と協力、協働の必要性を改めて実感させられました。また、コロナ禍による中断はあったものの、続けていくことの大切さも感じました。一方で、学校行事との棲み分け方や負担に配慮した内容・方法の検討、有効性の検証など、様々な課題もありますが、子どもたちや学校、保護者や地域の意見をいただきながら、続けていきたいと考えています。

現在、教育を取り巻く環境には多くの課題があり、改善に向けて取り組んでいるところではありますが、少子化に対応して活動内容の充実を図るための部活動の地域移行に地域格差や経済格差が生じたり、学力向上や働き方改革につながるはずのＩＣＴ活用・ＤＸ推進が、学校現場への新たな負担を生んだりしている面もあります。課題解決に向けて、新しい仕組みや技術を積極的に活用していくことが必要であることは確かです。しかし、それらはあくまでも手だてやツールであり、本当に大切なのは日々の地道な授業と豊かな体験の積み重ねです。そして、それを支えるのはやはり人です。本末転倒になってしまってはなりません。人材の育成・活用とその力が発揮できる環境づくり、関係者の相互理解と協働がなければ根本的な解決に近づくことはできないと思っております。

福島県公立学校退職校長会安達支部の先輩・同輩の皆様には、今後とも安達地区の学校・教育行政にお力をお貸しいただき、人の育ちと体験を支えていただきますようお願い申し上げます。

会員十年目の近況報告

「難しい野菜作り」

小泉裕明

「農業をするしかない」公務から離れて考えた結果です。少しばかりの畑があるので、元気な内は健康作りを兼ねて野菜作りに取り組むことにしました。

農家の仕事は初めてで、土作りの仕方や野菜に合った肥料の与え方や消毒の仕方など詳しいことは全く分かりませんでした。

また、作った野菜を「とうわ道の駅」に出荷する際は、生産者の会員に登録し、野菜の放射能物質の検査を実施するとともに、年一回、生産している場所の土壌検査が必要となることなど初めて知りました。

とうわ道の駅から蕨の苗を購入し植え付けをした際には福島県に生産者として登録しました。そして、作った蕨を県に提出し、放射性物質の検査を三回受け、漸く販売許可が出ました。

また、初めてネギ作りをした際には、苗作りの仕方、消毒の薬の選び方と実施する時期等分かりませんでした。そこで、近所のネギを専門に作っている方に色々教えていただきました。現在は、ネギの状況を見て、ネギの病気や消毒の仕方など考えることができるようになりました。現在では、少しずつマルシェに出荷しています。

八月末には、玉ねぎの苗床を作り種を撒きました。芽が出て大きくなり、十一月の植え付けと来年の収穫を楽しみにしています。

また、ワイン用の葡萄の木も少しあり手入れをしています。春三月から枝の剪定、根切り虫等害虫対策の消毒等があり、九月の収穫を目標に勉強をしています。

この他、サークルや各種団体に所属し、活動をしています。退職校長会の行事への参加も楽しみにしています。

「退職後の五年間」

原瀬久美子

今年七月に、七十歳を迎えました。

私は六十五歳まで仕事をしていましたので、それからの五年間、自由時間がたくさんあり、自分の計画で快適に暮らしています。

一に、体力づくりとして、女性だけの「カーブス教室」に週五回通っています。お陰で病気もせず、元気に暮らしております。

二に、午後は自由時間がたっぷりあり、TV三昧です。特に、サスペンスは大好きで朝新聞を見たら、番組表をチェックして、楽しんでいます。特に、十津川警部シリーズは、欠かさず見ています。

三に、月一回「自治川柳教室」に通っています。埼玉から講師の先生をお迎えして、ご指導をいただいています。

そのため、新聞記事はていねいに読むことにしています。

四に、全国退職女性校長会「梅の実会」に所属し、活動しています。令和六年十月には、磐梯熱海「ホテル華の湯」で、全国大会が開催されます。毎月会合が開かれ、実行副委員長として、その準備にあたっております。

五に、退職公務員連盟安達支部副支部長を務めさせていただき、毎月の役員会で楽しく有意義な時間を送っています。執行部員は十二名で、熱心な方々ばかりです。今年度六月に研修旅行で、震災遺構請戸小を視察し、圧倒させられました。九月十日(土)二本松御苑で「支部集会・敬老賀寿会」を開催したところ、コロナ禍にもかかわらず、四十名の皆様にご出席いただき、素敵な笑顔に出会うことができました。

結びに、コロナ禍という難局を乗り切って、健康で楽しく有意義な時を過ごしていきたいと思います。

支部第二回研修会

「安達三十三観音とその背景」

講師　二本松市文化財保護審議会委員　佐藤　克男　様

十月十四日（金）十時より、二本松文化センター研修室において、本会員二十四名の参加のもと、今年度第二回研修会を開催した。

二本松市文化財保護審議会委員の佐藤克男様を講師にお願いして「安達三十三観音とその背景」という演題で講演をいただいた。

佐藤様は、旧安達町教育委員会教育次長を務め、二本松市教育委員会生涯学習課長・安達支所長を歴任された。今回の講演にあたって、講演のレジュメ、できたばかりのパンフレット「安達三十三観音巡り」（安達三十三観音加盟有志一同作成）等を準備してくださり、安達三十三観音とその歴史的背景についてお話してくださった。

まず、仏教の始まりと歴史についてお話をされた。

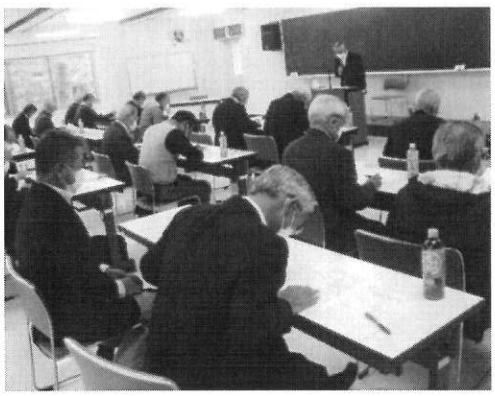
〝人の道〟を説いたとされる四聖人のひとりお釈迦さまは、インドのビハール州に生まれ、十六歳から三十六歳にかけて修行をし、菩提樹の下で悟りをひらいたことや、仏（釈迦仏）・法（教え）・僧（実践者）の「三宝」、原始仏教と呼ぶ「三学」すなわち戒律（いましめ）・智慧（縁起と観察）・禅定（心の集中）がその教えであり、紀元前において広く伝播したと話された。

しだいに、観音信仰が広がり、四世紀末から五世紀にかけて中国・東アジアへ伝来して、観音像が造設されてきたと話された。観世音菩薩の教えとは、人間の生活には苦しみがつきものである。思いがけない災害に人間の無力を感じる。つかまるところが無ければそのまま倒れてしまう。観音は優れた知恵と能力を一身にそなえ、誓願によりあらゆる生きものの苦しみを救うという教えであるというお話であった。

仏教が日本に伝来してから観音信仰が広まり、六観音が定着してきたことや仏教界では、三十三の救いがあると言われていて、数多くの困難からの救いということから、三十三観音の巡礼が始まったというお話であった。

一一六一（応保元）年に園城寺の僧覚忠が三十三所巡礼をしたとされ、一二〇〇年代鎌倉時代板東三十三観音が生まれ、一四〇〇年代室町時代秩父三十三観音、江戸三十三観音、会津三十三観音が生まれたとされており、安達三十三観音は、江戸時代の一六〇〇年代中頃、二本松藩主丹羽光重公が藩内三十三観音を開基し発生したとされ、巡礼がしだいに普及してきたこと等をお話してくださった。

パンフレット「安達三十三観音巡り」の札所一覧を見ながら、一番札所の治陸寺には、観音堂の奥に木幡の弁天さまをお祀りしてあることとか、十番札所の西念寺には、伊達政宗が植栽したという「臥龍の松」があるという話のほか、皇室献上品でもある「会津身しらず柿」の発祥の地であることなど特徴のあるお寺を数か所紹介してくださった。



講演の最後に、仏教の雑学と

して、インドや中国、韓国そして日本における仏教の現状についてお話され講演を終えられた。

佐藤様の豊富な知識と話題にあふれた講演を聞き、是非安達三十三観音を巡ってみたいという思いになり、会員一同、実に有意義な研修となった。

研修会参加者の感想

是非訪れたい安達三十三観音

福本　隆

私が中学生の時に、佐藤様に野球を教わりました。以来、様々なスポーツの場面でお会いする機会があります。今回の講演を拝聴し、佐藤様が歴史や文化面にもより造詣が深いことを知り、改めて尊敬の念を抱きました。

「法華経普門品」の中にあるという観音菩薩の教え「衆生困苦をこうむりて無量の苦身にせまらんに観音の妙智の力よく世情の苦を救う」についてわかりやすく説明してくださり理解することができました。また、「六観音と六道抜苦」のお話から、なぜいっぱい観音さまがあるのかとか、仏さまの尊格のことなど、私にとりまして、とても新鮮なお話で印象深いものでした。

さらに、安達三十三観音のお寺にまつわる話題には、時間を忘れてしまうほど聞き入ってしまいました。今度是非安達三十三観音を巡り、郷土の歴史・文化に触れてみたいと思いました。

ご講演、誠にありがとうございました。

祝　瑞寶雙光章

今年の秋の叙勲で永年にわたる教育功労の功績により受章されました。支部会員一同、心より祝福申し上げます。

小泉裕明先生

昭和51年４月教職に就き、木幡一（現東和）小、二本松北小の校長を歴任。
前二本松市教育委員会教育長。

クラブ活動の紹介

自然探勝クラブ

錦秋の山本不動尊を訪ねて

〈探勝会〉

十一月十日、秋晴れの中、秋季探勝会を、開運・厄除けの山本不動尊を中心に十名の会員の参加で実施した。

探勝会のこれまでの無事故のお礼と会員の今後の無病息災を願って参拝した。

九十分の自由行動時には、境内の紅葉巡り、ボケ防止観音の拝観、百三十段の石段を登り奥の院詣でをするなど各々有意義に過ごした。

〈総会・懇親会〉

探勝会に参加できなかった四名も加わり十四名で「大宗」で行った。

十五年で三十五回の探勝会の締めくくりの総会では、各世話人からこれまでの探勝会実施について報告があり、今後の活動については、会員から「これからも継続や存続したい」との意見も出るなど心残りはあるが一応終止することとなった。

懇親会では「身近な文化財」や自然に接することができた。」「思い出に残るクラブだった。」「すばらしい計画だった。」等々多くの感想が述べられた。最後に万歳三唱で閉会した。

総会・懇親会　大宗ニテ

山本不動尊本堂前ニテ

新入会員の挨拶

微力ながら できることを

遠藤春光

三十七年間の教員生活。多くの方からお力添えをいただき、何とか勤め上げることができました。皆様本当にありがとうございました。これからは、退職校長会の会員としてお世話になります。

さて、退職後は市の家庭児童相談員の職を紹介していただき、職種は異なりますが、子どもや保護者の方と関われる仕事に就くことができ、ありがたく感じております。

ここで、この半年での生活の変化や仕事を通して感じていることを簡単にお話いたします。

私生活では仕事のオンとオフがはっきりしたことです。現職当時は、常に学校のことが頭にあり、気の抜けない毎日でした。現在は、週四日の勤務で休みが一日増えたのですが、日数以上に休んでいるように感じます。やりたいことに時間を費やしたり、家族とともに過ごす時間が増えたりとゆったりと暮らすことができています。

仕事を通しては、子どもたちの環境は決して容易ではないことを実感しています。

恥ずかしい話なのですが、現職当時は、子ども食堂やフードバンクという言葉は都市部の話であり、身近な問題として感じていないところもありました。しかし、今の仕事を通して、十分な食事ができない家庭やヤングケアラーの問題、親のダブルワークの実態等々、様々な課題に直面しています。

家庭や学校での子どもたちの生活、家族の関わりを支援するのが私たちの務めなのですが、思うような成果はなかなか現れません。子どもたちのために何ができるかを考え、力不足にもどかしさを感じながら、日々取り組んでいるところです。

退職後の近況
～鎮守の神に祈る日々～

安齋宏之

三月末に定年退職をして、あっという間に半年が過ぎました。多くの校長先生方は、退職数年前から退職後の生活について、いろいろと悩まれるかと思いますが、私は、幸か不幸か教職に就いたときから退職後の生活が決まっておりました。それは、我が家が代々受け継いでいる神職としての生活です。

現在、二本松市上川崎に鎮座する八幡神社第十七代宮司の職を務めております。当社は、寛正七年（一四六六年）愛宕舘主佐藤大膳太夫が産土神として奉ったが始まりで、その後二本松藩主の崇敬するところとなり、貞享四年（一六八七年）二代藩主丹羽若狭守長次公の寄進により、現在地に総欅作りの本殿が造営され遷座されました。

宮司の一日は、毎朝の日供に始まり、掃除、社務というのが基本で、参詣者があればご祈祷を行ったり、地鎮祭などの出張祭典を行ったりします。しかし、鎮座地もご多分に漏れず過疎と高齢化の進行により氏子の減少が続き、神社の運営も年々厳しさが増しています。

しかし、今、コロナ禍やロシアによるウクライナ侵攻、物価高や円安の進行などにより、氏子の皆様が日々の暮らしに不安を抱いている様子も見て取れます。神道では、そのような心の状態を「穢れ」と呼びますが、氏子の皆さんの罪や穢れを祓い、清らかな状態に立ち返り、安寧な日々が送れるよう、静かに大神様に祈りを捧げるのが今の私の大切な務めとなっています。

結びに、今もコロナ禍の厳しい環境下で、子供たちのために日々頑張っておられる校長先生方のご健康とご多幸を大神様にお祈りし、私の近況報告と致します。